

秋期福音特別集會集(1)(京都御車會館)

遺れる者

——イザヤ書第1、4、7、10、11、46章——

1990年11月17日

小池辰雄

ゴッド・ファースト 個の存在がいかに大事か 偶像崇拜による滅び シェアールヤシユープ
(遺れる者^{きた}帰り来るべし) 選ばれた者は遺れる者 キリストに帰れ 直ちにキリストの中に入る
その日その時 神を神の故に信ずる 棄て遺し 祈り

【イザヤ1】

2 天よきけ、地よ耳を傾けよ……われ子をやしない育てしにかれらは我に
そむけり。3 牛はその主をしり、驢馬はそのあるじの厩^{うまや}をしる。されどイス
ラエルは識らず、わが民はさとらず。4 ああ罪をおかせる国人、よこしまを
負う民、悪をなす者のすえ、壊^{やぶ}りそこなう種族、かれらはエホバをすて、イ
スラエルの聖者をあなどり、之をうとみて退きたり。5 なんじら何ぞかさね
がさね悖^{もと}りて、なお打たれんとするか。その頭はやまざる所なく、その心は
つかれはてたり。6 足のうらより頭にいたるまで全きところなく、ただ創^{きず}痕
と打傷^{はれもの}と腫物とのみなり。而してこれを合やすものなく、亦あぶらにて軟ら
ぐ者なし。7 なんじらの国はあれすたれ、なんじらの諸^{まち}邑^{まち}は火にてやかれ、
なんじらの田畑はその前にて外人^{あだしびと}にのまれ、既にあだし人にくつがえされて
荒れすたれたり。8 シオンの女はぶどうそのの廬^{いおり}のごとく、瓜田^{うりばたけ}の仮^{かり}舎^やのご
とく、また囲みをうけたる城のごとく唯だひとり遺^{のこ}れり。9 万軍のエホバわ
れらに少しの遺^{のこ}をとどめ給うことなくば我らはソドムのごとく又ゴモラに同
じかりしならん。……

18 エホバいいたまわく、いざわれらともに論^{あげつ}らわん。なんじらの罪は緋^ひの
ごとくなるも雪のごとく白くなり、紅のごとく赤くとも羊の毛のごとくにな
らん。……

21 忠信なりし邑^{うかれめ}いかにして妓女^{うかれめ}とはなれる。昔は公平にてみち正義その中
にやどりしに、今は人をころす者ばかりとなりぬ。……27 シオンは公平をも
てあがなわれ、帰り来たるものも正義をもて贖^{あがな}わるべし。

【イザヤ4】

3 その日エホバの枝はさかえて輝^あかん。地よりなりいつるものの実はすぐ



れ並びうるわしくして、逃^{のが}れのこれるイスラエルの益となるべし。而してシオンに遺れるものエルサレムにとどまれる者すべて此等のエルサレムに存^{ながら}うる者のなかに録^{しる}されたるものは聖となえられん。

【イザヤ7】

1ウジヤの子ヨタムその子ユダヤ王アハズのと看、アラム(スリヤ)の王レヂンとレマリヤの子イスラエル王ペカと上りきたりてエルサレムを攻めしが、ついに勝つことあたわざりき。2ここにアラム(スリヤ)とエフライム(イスラエル)と結合なりたりとダビデの家(アハズ王)につぐる者ありければ、王のこころと民の心とは林木の風にうごかざる如くに動けり。

3その時エホバ、イザヤに言いたまいけるは、今なんじと汝の子シエヤルヤシューブと共にいでて布をさらす野の大路のかたわらなる上池^{かみのいけ}の樋口にゆきてアハズを迎え、4これに告ぐべし。なんじ謹みて静かなれ、アラムのレジン及びレマリヤの子はげしく怒るとも二つの燃えのこりたる煙れる片柴^{はしば}のごとし、懼るるなかれ心をよわくするなかれ。

【イザヤ10】

20その日イスラエルの遺れる者とヤコブの家ののがれたる者とは再びおのれを撃ちし者にたよらず、誠意をもてイスラエルの聖者エホバにたよらん。21その遺れるものヤコブの遺れるものは大能の神にかえるべし。ああイスラエルよ、なんじの民は海の沙のごとしといえども、遺りて帰ってきたる者はただ僅^{わず}少ならん。

【イザヤ11】

11その日、主はまたふたたび手をのべて、その民ののこれる僅かのものを、アッシリヤ、エジプト、パテロス、エテオピア、エラム、シナル、ハマテ、および海のしまじまより贖いたもうべし。12エホバは国々の為に旗をたてて、イスラエルの逐^おいやられたる者をあつめ、地の四極^{よものはて}よりユダの散り失せたるものを集^{つど}えたまわん。

【イザヤ46】

3ヤコブの家よ、イスラエルのいへの遺れるものよ、腹をいでしより我におわれ、胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。4なんじらの年老るまで我はかわらず、白髪となるまで我なんじらを負わん。我つくりたればもたぐべし。我また負いかつ救わん。

【詩篇19】

2この日ことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。3語らずいわずその声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく……。



●ゴッド・ファースト

1959年から私がお伺いしたというようなわけで、もう30年たったのですね。けれども、いつも新しいんです。ということは、我々の信仰は決して溜めてない。いつも流れている。ですから、常に新しい。信仰の貯蓄はダメなんです。こちらがしょっちゅう空っぽでいないと。今、司会者が告白された。まことに然りです。

「ゴッド・ファースト」(God first 神優先)

と言われた。その通り。しかし、「ゴッド・ファースト」は現実はどうしたらいいのかと。これ、答えられますか。我々の側から何を勢い込んでもダメなんです。窓を開いて太陽の光を入れる。自分を開けっ放して、キリストに圧倒される。これが「ゴッド・ファースト」。私は、

「キリストに圧倒されている」

と、よく言います、キリストの愛に…(異言)…。このキリストに圧倒されると、それが「ゴッド・ファースト」になる。何をするにも、先ず祈り込んで、ぶっ倒れて、キリストに圧倒される。そうすると、もの凄くそこから、キリストの業が展開し始める。自分のしようとしている業が、みなキリストの業に成ってくる。だから、もはや自分の仕事でなくなった、自分の仕事になってくる。そういう角度から、皆さん、毎日を力強く生きてください。

私みたいなヤツは、もう、上からの力がなかったら、どうにもならないです。そういう、有難いことになった。こっちは、窓を開けさえすれば、太陽が入ってくる。いやあ実に、空気には囲まれ、空気を吸わないと思っても、吸わざるを得ない。氣の世界。この靈氣が、キリストの靈氣が入ってくる。

酸素吸入をしながら生きている人が居られる。私はこの方のために毎晩祈っています。そして言うんです、

「あなたは酸素吸入でやっているけれども、あなたの魂は必ずキリストを吸っていただく。キリストの氣を吸っていれば、酸素吸入がどうであろうと、大丈夫ですよ」

と。また、肺結核で手術した人がある。その人にもこないだ言った、

「心配ありませんよ、あなたは祈る時に、片手で祈りなさい。キリストの御手は片一方にきて、あなたの手に合わせますよ。祈りは、そこからキリストの靈が入ってくる。それで生きていきなさいよ、心配いりません」

と。こないだ、ある会合にその人が来ましたから、私はじかじかに按手して祈ってあげた。後から言ってきました、

「先生、身心がすっかり軽くなりました、嘘のようです」
私は、

「そうか、今度は私ではない。あなたが祈るときにキリストがあなたに按手してい



る、それを本当に受けとって祈りなさい」

と。何しろ、私にとつてはキリスト一切です。初めも中も終わりも、主イエス・キリスト。そういうことになったら、これが「ゴッド・ファースト」の現実だと思います。

●個の存在がいかに大事か

それでは、イザヤ書に入ります。私は、旧約のイザヤ書には、それこそ圧倒されている。もう旧約聖書では、イザヤ書一卷でもいい。大変です、これは。聖書の縮図みたいで。私の第十巻もイザヤ書が非常に多い。新約にもつとスペースが欲しかったけれども、預言書を書いていううちに足りなくなつた。仕方がない。本当は第十巻の続巻がもう一卷ぐらい書けます。そんなことやつてゐる暇はありませんけれども。

「²天よきけ、地よ耳を傾けよ」(イザヤ1:2)

まず、これに驚く。こんなことを普通の神学者も牧師さんも言わない。

「天よきけ、地よ耳を傾けよ」

人間は相手にならない。西郷南洲が、

「天を相手にせよ」

と言つた。神さまの大創造であるところの天地。天地に向かつて、聞いてくれと。人間に話しても、彼らは聞かないから仕方がない。

「お前たちは聞いても分らない」

と、はつきり言っているんだ、イザヤは。

大自然というと、私はすぐゲートを思い出す。大自然を相手にすると、神の大創造の、

「²この日ことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。³語らず

いわずその声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく……」(詩篇19:2)

3)

と。凄いいね、あの詩篇の第19篇は。イスラエル人は、本当に形容詞でものを言っているのではない。彼らにとつては、すべてこれ現実なんです。観念的な言葉を使つても、それは具体的な内容を持つている。ユダヤ人の強さというものは、本当の現実性を持つているから。我々も、どうぞ、キリスト召団の方々は、これは複数ですけども、皆さんは、単数だと思つてください。M君が、京都召団とは何かと聞かれたら、「私だよ」とM君が答える。そういう答えができれば、キリスト召団はダメなんです。一人ひとりがその召団を背負っている。大勢で何かをするなんていうんではない。個の存在がいかに大事かということだ。教会は、すぐ複数でものを考える。ところが、福音書の世界は、聖書の本当の世界は単数です。神・キリスト・我。その単数が、本当に主に在つて一つのところが――これは人数はどうでもいい。

「二、三人わが名に在りて集まるところに我も在るなり」

とキリストが言われた――それが頼もしいんです。



「エルサレムに一人の義人が、義を求める者があつたら、エルサレムを赦す」

と、預言者エレミヤに言った。エレミヤの5章に書いてある。本当の預言者はみんな独り。本当の使徒も独り。本当のクリスチャンも独り。

「我ら、我ら」

という言葉がよく出て来ますけれども、我らの奥に「我^{われ}」というものがなかったら、ダメなんです。その我は、もちろん手離しの我ではない。キリストに在つての我。キリストなき我なんてものは本当は在りはしない。そういう、キリスト召団とは単数なりということ。私は自分のことを言つてはおかしいけれども、

「我一人にて酒槽^{さかぶね}を踏み」

と。イザヤ書63章の言葉です。私の伝道なんかももの数ではありませんけれども、私は正直一人で酒槽を踏んできた。家庭の中にも、本当に私と一緒になるものはいない。それは、いろんな意味で、家内は助けてはくれませんでしたけれども。

大体、昔から、『曠野の愛』とか何とか、みんな私一人でもつて書いて、一人でやつてゐる。発送も何でも全部一人で。今でも――東京の召団の方はよくやつてくださつていますけれども、日曜日の午後だけで――結局、普段の日はみんな私一人でやつてゐる。これはしょうがない。私の在り方なんだから。しかし、有難いことには、キリストという驚くべき一者が一緒になつてくださったので。もう正直、どう思われても、どう取り扱われても、何と言われても、一向差し支えなくなつてしまった。しかし、そこにキリストはござる。

皆さんも、こういう集會に来ていらつしやる一人ひとり、天下一品です、一人ひとは。これは、さつきも言いましたように、大芸術家の神さまは決して同じものを造らない。おのが路を歩いて行く。それが天道に即するんです、キリストに在つては。その天道に即した一つ一つの個別が大きなハーモニーをなしていく。人間的な組織だとか、いろんな構造だとか、そんなことは考える必要はない。

●偶像崇拜による滅び

「天よ聞け、地よ耳を傾けよ」

から、いかに人間が相手にならないかと。預言者は孤独ですよ。

「われ子をやしない育てしにかれらは我にそむけり」(イザヤ1:2)

この「子」というのは「バースム」という複数ですけども、みんな背いた。神に叛くこと、背を向けることが、これが罪です。

「牛はその主をしり、驢馬はそのあるじの厩^{うまや}をしる。されどイスラエルは識らず、わが民はさとらず。」(イザヤ1:3)

動物に劣るではないか、動物を見てみると。情けなくなつてしまつたね、人間は、イスラエルの選民なんていつたつてダメではないかと。しかし、この時は随分ひどいんですね。



これはもともとは偶像崇拜から来ている。エホバの神を棄てて、偶像崇拜して乱れて、アッシリヤがどんどんやって来て、残るのは北イスラエルのサマリヤ、南ユダのエルサレム。その他の地方はもう散々蹂躪され始めていた。

「⁴ああ罪をおかせる国人、よこしまを負う民、悪をなす者のすえ、壊り^{やぶ}そこなう種族、かれらはエホバをすて、イスラエルの聖者をあなどり、之をうとみて退きたり。」(イザヤ1:4)

「⁵聖者」^{しようじや}「カードーシュ」という言葉はイザヤが特別に使った。もう、姿は滅びに向かっている。文明文化が円熟すると滅びに向かう。日本は危ない。経済大国なんていい気になって、とんでもない。精神的に日本が一番危ないのではないですか。もう、土地問題の現象をみても分かります。こんなバカげた事は他の国には有りはしない。

「⁶なんじら何ぞかさねがさね^{もと}悖りて、なお打たれんとするか。その頭^{かしら}はやまざる所なく、その心はつかれはてたり。⁷足のうらより頭にいたるまで全きところなく、ただ創痕^{きず}と打傷と腫物^{はれもの}とのみなり。而してこれを合^あわすものなく、亦あぶらにて軟^ならぐ者なし。」(イザヤ1:5-6)

もう打つにも疲れてしまう。もの凄^{すご}いことを言っているね、全身創痕だと。救いようがない。預言者はどの預言者も遠慮なく凄^{すご}いことを言うからね。

「⁷なんじらの国はあれすたれ、なんじらの諸^{まち}邑^{まち}は火にてやかれ、なんじらの田畑はその前にて外人^{あだしびと}にのまれ、既にあだし人にくつがえされて荒れすたれたり。⁸シオンの女はぶどう^{むすめ}そのの廬^{いおり}のごとく、瓜田^{うりばたけ}の仮舎^{かりや}のごとく、また囲みをうけたる城のごとく唯だひとり遺^{のこ}れり。」(イザヤ1:7-8)

エルサレムは孤立状態。イザヤは南ユダの預言者ですが、北イスラエルは紀元前721年に滅びてしまったから。

●シエアールヤシューブ(遺れる者^{きた}帰^{かえ}り来るべし)

「⁹万軍のエホバわれらに少しの遺^{のこ}をとどめ給うことなくば我らはソドムのごとく又ゴモラに同じかりしならん。」(イザヤ1:9)

昔の死海の南の方にあつたソドム、ゴモラ、みんなこれは火にて焼かれてしまった。あの悖^{もと}れる、混乱の頹落^{まいち}した邑。そうなつてしまう。

「遺れる者^{きた}をとどめ給うことなくば」

と。イザヤ書で非常に大事な一つの言葉は、この「遺れる者」という言葉なんです。この場合は「サーリート」という言葉が使つてある。

「シヤール」「シエアール」

という、二つの言葉がありますが。その「遺れる者」を、少しここでもつてこれから、他のイザヤ書のところを見えます。



非常に著しいところは、イザヤ書7章3節、

「ウジヤの子ヨタムその子ユダヤ王アハズるとき、アラム(スリヤ)の王レヂンとレマリヤの子イスラエル王ペカと上りきたりてエルサレムを攻めしが、ついに勝つことあたわざりき。²ここにアラム(スリヤ)とエフライム(イスラエル)と結合なりたりとダビデの家(アハブ王)につぐる者ありければ、王のこころと民の心とは林木の風にうごかざる如くに動けり。

³その時エホバ、イザヤに言いたまいけるは、今なんじと汝の子シエヤルヤシユーブと共にいでて布をさらす野の大路のかたわらなる上池かみのいけの樋口にゆきてアハズを迎え、⁴これに告ぐべし。なんじ謹みて静かなれ、アラムのレジン及びレマリヤの子はげしく怒るとも二つの燃えのこりたる煙はしばれる片柴のごとし、懼るるなかれ心をよわくするなかれ。」(イザヤ7:1-4)

ここでもって、
「謹みて静かなれ。じつとしていろ、神さまの力を見ている」

と、こういうわけです。ここに、

「シエヤルヤシユーブ」

という言葉がある。これは熟語ですけれども、ヘブライ語で

「遺れる者きた帰り来るべし」

という言葉です。「シエアル」というのは「遺れる者」、「ヤーシユーブ」というのは「帰り来るきたらん」。

「シユーブ」

というのは「帰る」という字、

「方向転換してそっちの方へ行く」

という字です。預言でもって、イザヤの子供の名前を「シエアルヤシユーブ」という。いい名前だね。私はいつか自分のことを「シエアルヤシユーブ」なんて書いたことがある。「帰り来るきた者」が「遺れる者」になるんです。

「遺れる者きた帰り来るらん」

と。神さまのもとに帰り行く者、祈り行く者、祈り入る者、それが遺れる者です。

●選ばれた者は遺れる者

召団の皆さんは、一人でお祈りになる時に、キリストの中に帰り入ってくださいよ。帰入、祈入です。とにかく、入らなければダメなんです。

「我キリストのうちに入れり、キリストわがうちにあり」

と。内在関係にならなければ、本当の現実でない。信仰は仰ぐのではない、信じ行く(信行)、信じ交わる(信交)なんだ。そういう世界に入って、一如の境地に入って、初めて神を知る



ということが言える、キリストを知るということが。そういう現実に入らないで、「知る」なんて言えない。ヘブライ語の「知る」というのはそれだけ深い言葉です。

この人はなんとか救ってやりたいなと思つたら、一対一で懇ろに語つてやりなさい。それが本当の伝道者なんだ、あなた方。

「来^{きた}りて見よ」

と、サマリヤの女が言つたでしょ、驚いてしまつて、

「みんな来てご覧、大変な人がいるよ」

と。水汲むことも忘れてしまつた。それが、さつきの「ゴッド・ファースト」「キリスト・ファースト」ということ。キリストはまた「神・ファースト」「ゴッド・ファースト」だよ。キリストは、

「私は食べ物是要らん、人に伝えることが自分の食べ物だ」

「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。私たちは、

「我を見し者はキリストを見し者なり」

と言う。証しびと、証者とはそういうものです。もう、あなた方を通して、第二の宗教改革が始まっているんです。遠慮要らんですから、やってくださいよ。私がいつまでもここで語っていたのではないんだ、本当は。まだ少しはやりますけれども。特に東京の連中なんかはいい気になつてしまうから、段々集會をよそうかな。今、一か月に3回やっているけれども、そのうちに2回にしようかな。愛すればこそ、私は極端なことを言うんです。しようがない。

我々は、「選ばれたる者」は「遺れる者」なんです。キリストに選ばれた者は遺れる者。イスラエルの民は本当は遺れる民だったんだが、大部分がダメになつてしまつた。仕方がないから、その中の本当に遺れる者を、振るわれない者をまた神さまは遺しておく。パウロなんて奴が、遺つたかと思つたら、とんでもない遣り方をして、キリストに反対して――パリサイの親玉だからね、パウロは。ガマリエルの第一弟子なんだ――いい気になつていた。ところが、どっこい。優れた人は、ヘタすると、サタンの虜になるからね。キリストはちゃんと見ているんだよな。ダマスコ途上のパウロのひっくり返りくらい鮮やかなドラマは他にありませんか。大変なひとですね、イエス・キリストというのは。私は、

「大変なひとだ」

というんだ、キリストのことを。大変なひとで、どうにもならん。圧倒されるんだ。降参しながら進んでいるんです。

イザヤ書の4章2節、

「²その日エホバの枝はさかえて輝かん。地よりなりいづるものの実はすぐれ並びうるわしくして、逃^{のが}れのこれるイスラエルの益となるべし。³而してシ



オンに遺れるものエルサレムにとどまれる者すべて此等のエルサレムに存^{ながら}する者のなかに録^{しる}されたものは聖となえられん。」(イザヤ4:2~3)

しきりに「遺れる」と書いてある。滅ぼされるけれども、それでもなお遺る。

たった一人になつてもいい。ペンテコステだつてそうですよ。三千人ひとり返つた。けれども、そこで果たして本当に遺つたのは何人いるか。新約聖書を書かせられたのは数人しかない。遺れる者が書いた。聖書はみんな遺れる者の書だ。「遺れる者」とは、「選ばれる者」と同じことです。

「終わりまで耐え忍ぶ者は救われるべし」

という言葉があるけれども。

●キリストに帰れ

私は50年間伝道して、いろんな事情で人が出ていきました、一人ひとりいろんな違う事情で。いいよ、出て行つたつて。私は決して追わないんだから。

「出るも入るもご勝手にございます。会員が何名になろうが、最後は私一人でもいいよ。面壁ではないが、柱に向かつて伝道したつていいんだ」

なんてなことを言ったこともある。集會をいい加減にしていたときは、私は三度解散した。

「二か月祈つて来い」

と。この福音の世界は、いわゆる御利益ではないですからね。神の栄光が、神の業が現れるためのもので、そのためには、こちらは僕となつて進んで行く。

その「神第一」から抜けてしまったから、全世界がおかしくなつてきた。そのおかしさが極端になつてきて、どうにもならんと、気がついたのはゴルバチョフだ。しかし、ゴルバチョフも、グラッドストーンやリンカーンやビスマルクのような信仰があれば、もつと凄いいけれど。まあ、そこまではないらしい。クロムウェルも凄いいね、彼の演説なんか読むと、凄いいよ本当に。カーライルの“Letters and speeches of Oliver Cromwell”という有名な本がある。ダンテが、

「神につける者でもなければ、神にそむく者でもない。天国も地獄も彼らを外に出してしまつ」

「地獄の外にそういうどつちつかずの分からない奴らがたくさんいる」と書いてある。面白いね、ダンテらしい。あんな者は相手にするなと。

神に背いていた、キリストに背いていたパウロがひっくり返されて、今度は、キリストの白熱の弟子になつた。我々の生命は、地上だけのものではないんだから、その大事な生命を損ねてどうするかというわけです。それをいい加減にしているんだからね、みんなおめでたい話だよな。もう、さつきから申し上げている、「単数」でいいから、烈々とやつてくださいよ。「烈々」といつたつて、ただ、大袈裟にものを言うということではない。じつと、



もの凄い火が燃えて、炎も出ない、じつと燃えている。いざとなったら、爆発する、そういう火です。死火山のように見えるところの活火山だよな。

イザヤ書10章、

「²⁰その日イスラエルの遺れる者とヤコブの家ののがれたる者とは再びおのれを撃ちし者にたよらず、誠意をもてイスラエルの聖者エホバにたよらん。」(イザヤ10・20)

「その日」というのは、終末的な最後の日です。終末的な救いのことは明日出てきますけれども。

「²¹その遺れるものヤコブの遺れるものは大能の神にかえるべし。ああイスラエルよ、なんじの民は海の沙のごとしといえども、遣りて帰りきたる者はただ僅少^{わずか}ならん。」(イザヤ10・21、22)

十二召団はわずかでいいよ。遺れる者は多くないんだから。ただ数を増やしたつてしょうがない。いい加減な数の百よりも、本もの5、6人の方がいい。うれしいですね。とにかく、一人ひとりが本ものになれば、もうあとは問題はない。本ものが何人集まろうが、これから凄いことをお互いにやっていくからね。

「キリストに帰れ」

と、ただそれだけ言いたい。人間の相互関係なんかどうだっていいではないですか。その、「どうだっていい」

と言う人が、本当の関係を結ぶことになるんです、主に在って。キリストの十字架にゆるされて、いかなる人をも赦すことのできないということはありません。それは、相手を受けとらなければ、しょうがないよ。その人がダメになるだけのはなし。

●直ちにキリストの中に入る

まだ、いくらでもある。イザヤ書の46章、第二イザヤになるけれども。

「³ヤコブの家よ、イスラエルのいえの遺れるものよ、腹をいでしより我におわれ、胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。⁴なんじらの年老るまで我はかわらず、白髪となるまで我なんじらを負わん。我つくりたればもたぐべし。我また負いかつ救わん。」(イザヤ46・3、4)

どこまでも遺れる者は、それを守ってやるぞと。そして、自分の使い手に、使徒に、エホバの僕にしてやると。そして、第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤを貫いている「遺れる者」というのはキリスト教の歴史にまでずっといく。要するに、新天新地が来るまで、神の民の歴史は遺れる者の歴史なんだ。

「いや、私は遺れる者だけの資格がありません」

なんて。「資格」ではないよ、遺れる者というのは。キリストの絶対恩寵の中に生きている



者は遺れる者になる。こっち側のどうかではない。絶対恩寵に生きているということは、さつきから申し上げているとおり、圧倒されて生きているということです。私は自分で大きな声は出しはしませんけれども、沈黙の雄叫びで、

「主さまー」

と、全存在でキリストに沈黙で叫びかける。直ちにキリストの中に入る。もう異言がほとばしってしょうがない。私の秘訣でも何でもない。

「パウロのキリスト神秘」ということをシュヴァイツァーが言いましたが、パウロが正にその現実生きていた。だから、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と、何回でも彼はそう言っている。ただ「信仰」なんて言っていない。

無教会にいた時に、「信仰のみ」とか言って、信仰をエトバス、サムシング(何ものか)にして、「信仰のみ、信仰のみ」とやっている。冗談ではない。くたびれてしまうんだ、そんなのは。

「私は信仰なんかありません」

と言っている。そんなこと言うものだから、私は嫌われるんだ。

「内村先生といえども使徒たちの次元からはズレてしまった」

なんて言うものだから。先生を尊敬してないのではないですよ。先生としてももちろん私は尊敬してます。けれども、これはしょうがない。キリストの直弟子の次元、預言者たちの次元が、慕わしくてしょうがない。

イザヤ書ぐらいは自分で写本して——これは本当は詩ですから、文語体は詩の形になってないのはいいかん。口語体は詩になっているからいいが——口語体の聖書を見て、そして文語でもって詩的に書いたらいい。文語体はなぜ詩の形にしないかと、私は出版社に時々言うんだけど、さっぱり変えてくれない。そういうのは買う人が少ないんだか何か知らんけれども。けちっているんだよな。

●その日その時

やっぱり、終末的なところだね。明日のところが連関しますけれども。「その日」「その時」と出てくる。11章11節、

「11その日、主はまたふたたび手をのべて、その民ののこれる僅かのを、アッシリヤ、エジプト、パテロス、エテオピア、エラム、シナル、ハマテ、および海のしまじまより贖いたもうべし。12エホバは国々の為に旗をたてて、イスラエルの逐いやられたる者をあつめ、地の四極よりユダの散り失せたるものを集えたまわん。」(イザヤ11・11・12)

これはみんな遺れる者。そして、更に遺れる者を全世界から造ろうとするのがキリストのなさる福音の世界になっていく。旧約では、まだイスラエルの民に限られています



ども。「その時」とか「その日」とか、そういう言い方は非常にもしろい。次元の違った段階の終末的な世界のことです。

イザヤ書1章18節、

「¹⁸エホバいいたまわく、いざわれとともに論らわん。なんじらの罪は緋のごとくなるも雪のごとく白くなり、^{くれない}紅のごとく赤くとも羊の毛のごとくならん。」(イザヤ1・18)

「なんじらの罪は緋のごとくなるも」

と、「たとえ緋のごとくであつても」という「イン」というヘブライ語が使つてあるが、「たとえ……であつても」という言い方です。緋のごとくであつても白くなる。これは、読み方によつては、

「雪の如く白くなせ、羊の如くになせ」

というように読めないこともない。ここでは「ならん」とあるが。これは論争ですから、むしろ「なせ」と読む方が論理的には合うくらいに思う。

「それをやつてごらん。だけど、本当はダメだよ。ダメだから、今度は白くしてやるぞ」

と、むしろ二段構えの二重の気持ちを持つたような、ヘブライ語というのは非常に弾力性があるから、そういうようにも、私はおもしろい取り方するんですけれども。

「たとえそうであつても、そういうようにしてやるぞ」

と。「たとえ」とありますから、だから、「してやる」と言つた方がむしろ自然なんです、文章としては。あるいは、

「たとえそうであつても、雪のごとくしてみろ」

と、それも言えないことはないけれども。

我々は自分を雪の如く白くできない。もし、それができれば、キリストは十字架にかかる必要はなかった。人間はパラダイス・ロストだからね、現実が。パラダイス・リゲインドとしたのはキリストですから。それだから、大変なものだよ、この十字架というものは。

「本当に自分で白くなれるのなら、なつてごらんさい」というわけなんだ。

「ダメだよ。だから、そうしてやるよ、白くしてやるよ」

と。これが本当の言葉だ。二重の言葉なんだ。こんなことは誰も言わない。学者というのは、どっちかに決めたがるんだよな。決める必要はない。言葉の深みというのは、一つの表現をすると片一方が抜けてしまうんです。

「²¹忠信なりし邑^{まち}いかにして妓女^{うかれめ}とはなれる。昔は公平にてみち正義その中にやどりしに、今は人をころす者ばかりとなりぬ。」(イザヤ1・21)

そういうひどいことになつてしまつたと。このあと、ダメなことがいろいろ書いてある。



「²⁷シオンは公平をもてあがなわれ、帰り来たるものも正義をもて贖わるべし。」
(イザヤ1・27)

これも有名な言葉ですね。「公平」というのは「審判」と同じ言葉です。公平なるさばき。人間の審判はしばしば間違えけれども、そうではない。「正義」は「義」という字です、「セデカー」という字だからね。

「義をもて贖わるべし」

と。この公平も義も神さまのものですよ。人間の側のものではないです。神さまの審判は正に公平。審判に間違いはない。

まあ、大変だよな、裁判は。本当の法哲学を心に福音の角度から持っている人が一番本当の審判ができるでしょうね。いわゆる法文でもって――

「儀文は殺し霊は活かす」

だから――儀文的にただ、「こう書いてあるからこうだ」なんて、そんな判断出しちゃ本当は困るんだ。この「公平」だの「義」はみんな最後の審判の時にそれが本当に現れる。しかし、審判そのものの、赦しそのものは、その事が起きた時に必ず臨んでいるんです。人間には分からないけれども。それは厳かなことです。だから、平伏していないとダメです。神の公平と義というものは、義というとか堅苦しいようだけれども、そうではない。

●神を神の故に信ずる

さつき歌った召団讃美歌(A32「イスラエル・ユダの」、これはイザヤ書(40〜48章)からきている讃美歌だから。

「まことにわれこそ 自らのゆえ

汝れらの罪過を 心にとめず、

汝れらの罪過は 雲散霧消!

わが愛わが義は 与えて尽きず!

「自らの故に」とある。審くのも自らの故に、赦すのも自らの故に。「相手の故に」ではない。全部、神さまの故なんだ。救いも救いのための救いではない。

「救われんがために信ずる」

のではない。そんなこと言うと、親鸞の『歎異抄』にやつつけられるよ。救いは結果として、神さまの聖意がそこに展開してくるけれども、それ自体を目的としているのではない。それは、神さまは根底において愛だからね。神さまの愛の業が現れると、それが救いになるというだけのことはなしだ。神の業なんだから、審判も赦しも、全部、神・キリストの業です。それが、

「神を神の故に信ずる」

ということになるんです。こつちが救われようが罰せられようが、地獄に入れられようが、



どうでもいい。神の故に信ずる。ヨブの信仰が終わりにはその角度になったけれども。

「たとえあなたが私を殺しても」

と、ヨブ記に書いてある。そういう、まさに神一切、神中心。焦点が神にある。キリストに焦点を置いた、そういう在り方でいけば、これが、神の栄光が現れる。たとえ躓いても転んでも、現れる。まあ、私の話はちよつと次元が深いから、ヘタすると誤解されるけれどもね。

いやあとにかく、預言者は、イザヤ書は凄いよ。エレミヤも凄いけれど。パウロ、ヨハネ、ペテロ。何といつても、聖霊の言なんです。聖書は凄いよ、本当に。聖書は本当に飽きないんだから、いつまでたつても。聖書に飽きたら、飽きた方が悪い。常に新たにです。あなた方、ご飯に飽きたと言って、ご飯を食べないんですか。毎日ご飯を食べている。私たちも神の言を毎日食べないと。神の言に飽きたら、おしまいだ。

●棄て遺し

そういうことで、私たちは、「遺れる者」というけれども、「遺されたる者」です。受け身です。自分で遺つたのではない。遺されたる者。神の栄光の現れるための恵みですよ。栄光の現れんがためのめぐみです。我々が恵まれんために恵まれる恵みではない。それは御利益になる。「めぐみ」という言葉が、ヘタすると御利益に響いて困るよな。

「恵まれました」

なんて、いい気になつてしまう。

「神の愛が現れました。圧倒されました。ぶつ飛ばされました」

と、それでいい。そういう

「遺されたる者」

です。いいですか。「遺れる者」は――私は最後にそれを言いたかった――「遺されたる者」なんです。ヘブライ語にはそう書いてないけれども。我々は、こつち側の何かで、遺っているのではない。

「お前はダメなものだが、しかし、遺してやって、お前を使うぞ」

と。人には「あの野郎!」なんて思われる奴が遺されて使われる。いわゆる立派そうな人が遺されない。人間の判断と違うよ、神さまが使おうというのは。だから、イスラエルの厄介な、うなじこわき民が捕まえられて、遺されたる者にされて、それでも、さんざん神さまに背いたり、偶像崇拜したりして、もうダメになる奴がたくさんある。だけれども、その中で遺される者があるぞと。これは神の栄光の現れんためである。

やがて、最後にたった一人の遺されたる人が現れる。キリストはすべてに棄てられた。弟子にすら棄てられた。躓かれた。

「何ぞ我を棄て給いし」



とまでキリストは叫んだ。けれども、キリストは本当に遺された唯だ一人の人。万人に棄てられて、神さまにも棄てられたと思っただが、どっこいそうではない。神さまのキリストを棄てたすがたは、本当に遺したすがただ。

「棄て遺し」

なんていう言葉はないけれども、キリストは「棄て遺し」なんだ。この唯だ一人の遺されたるキリストを通つて、多くの遺されたる者が歴史の終わりまで続いていくわけだ。そして、神の国を造つていく。もう日本の希望はありません。この遺されたる一人ひとりが、その希望を神さまからいただいて進むよりか仕方がない。横を見たって、希望はないです、日本は。内村先生が、

「こんな国はもう愛想をつかした」

と言ったが、その通りです。

政党の中にたつた一人の遺された青年がいてほしい。だから、ダンテは、

「二人一党だ」

なんて言われた。皆さん一人ひとりに、さつきから申し上げているように、ものすごい使命がかかっている。それは、キリストの圧倒するキリストの力で必ずいきますから、大丈夫ですよ。いいですか。圧倒されて進んでくださいよ。終わります。

● 祈り

祈ります。イスラエルの預言者たちを通し、深いまた畏るべき預言の波を滔々と降してください。たまことのおん神さま。そしてついにそれは、主さま、あなたに全部合流して大きなガリラヤの湖のごとくになりました。主さま、かくして本当にこの預言はすべてあなたにおいて成就し、ありがとうございます。

どうぞ、あなたが私たちの始めであり中であり終りであることをいよいよ私たちの日常生活を通して体験し、体現していくことができますように願ひ奉ります。私たちも、キリスト・ファーストで本当に進んでまいります。

私たちには、主さま、あなたが私たちの側のいかなることにかかわらず、圧倒的な愛をもつて私たちを包み、立たしてください。さるからありがとうございます。それに貫かれて進んでまいります。かくして、私たちはあなたに遺されたる者として聖名の栄光のために歌いつつ進んでまいります。

今、尽くしませんが、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹のそれと共に聖名にあつて捧げ奉る。アーメン。

